

『世の光が語る証し』 ヨハネ8:12-20

- 8:12 イエスは、また人々に語ってこう言われた、「わたしは世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう」。
- 8:13 するとパリサイ人たちがイエスに言った、「あなたは、自分のことをあかししている。あなたのあかしは真実ではない」。
- 8:14 イエスは彼らに答えて言われた、「たとい、わたしが自分のことをあかししても、わたしのあかしは真実である。それは、わたしがどこからきたのか、また、どこへ行くのかを知っているからである。しかし、あなたがたは、わたしがどこからきて、どこへ行くのかを知らない。
- 8:15 あなたがたは肉によって人をさばくが、わたしはだれもさばかない。
- 8:16 しかし、もしわたしがさばくとすれば、わたしのさばきは正しい。なぜなら、わたしはひとりではなく、わたしをつかわされたかたが、わたしと一緒にだからである。
- 8:17 あなたがたの律法には、ふたりによる証言は真実だと、書いてある。
- 8:18 わたし自身のことをあかしするのは、わたしであるし、わたしをつかわされた父も、わたしのことをあかしして下さるのである」。
- 8:19 すると、彼らはイエスに言った、「あなたの父はどこにいるのか」。イエスは答えられた、「あなたがたは、わたしをもわたしの父をも知らない。もし、あなたがたがわたしを知っていたなら、わたしの父をも知っていたであろう」。
- 8:20 イエスが宮の内で教えていた時、これらの言葉をさいせん箱のそばで語られたのであるが、イエスの時がまだきていなかったため、だれも捕える者がなかった。

●主題

- I. 大事なことが伝わらない
- II. 霊的な成長が鍵となる
- III. 改めて大事なことに目を向けたい

●序論

三浦綾子さんの「塩狩峠」が映画化されたときのエピソード。

「教会や家の中だけで鑑賞されるのではなく、映画館にかけられるような立派な伝道映画をつくれるなら原作料はいりませんから、その分を宣伝費に回して、多くの人に見てもらえるようにして下さい」と訴えたそうです。

あの綾子さんの秘書の方は、そのエピソードの結びにこうありました。

「伝道映画をつくるなら、原作料はいりません」といった三浦綾子さんの信仰を、神さまはこのように祝し用いてくださったのである。

わたしたちがもし、神さまに信頼してその栄光を求めて歩もうとするなら、神さまがその働きに手を添えてくださる。そして不思議な違いを見せてくださる…

先週、イエスさまの言葉を聞きました。

8:12 イエスは、また人々に語ってこう言われた、「わたしは、世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう」。

イエスさまがご自身を指し示し、聴く人たちに向かって語った言葉です。

この世に暗闇を感じる人にとって、キリストこそ救いと知ることのできる大切な言葉です。

●本論

I. 大事なことが伝わらない

8:13 するとパリサイ人たちがイエスに言った、「あなたは、自分のことをあかしている。あなたのあかしは真実ではない」。

パリサイ人たちが持ち出した教えでは…という枠組みをもってきて、そもそもあなたが自分のことをあかしするのだから、真実ではないという風に否定してきています。

ある意味律法主義というのは、自分の枠組みの中で人を測るというものです。その人が何を言おうと、その枠組みに収まらない者の言うことは、聞く耳を持たないし、聞く必要もない…ということでしょう。

伝えられている大事な言葉が、伝わらない…という現実が、そこにもあります。

振り返ってイエスさまとパリサイ人の対話に目を向けて見ると同じような光景が浮かび上がっているかのように感じます。

リビングバイブルではこんな風に訳しています

:13-14 すると、パリサイ人たちが言いました。「うそばかり並べ立てて、自慢話もほどほどにしたらどうだ。」

(イエスは答えた)「わたしはありのままを言っているのです。うそでも、でたらめでもありません。…」

大事なことが、大事なこととして伝わっていないという壁がある…ということをおぼせるエピソードですが、振り返ってわたしはどうだろうか、そう問われることは大切ではないでしょうか。 そんなわたしたちに…

II. 霊的な成長が鍵となる

「霊的に成長したい」。それはわたしたちクリスチャンにとっての大切な願いです。

そこで問われるのは、あなたの目指すところはあのイエスさまでしょうか？ それともここにあるパリサイ派の人でしょうか？…ということなのです。

実は、パリサイ人たちの生き方、ものの考え方は、わたしたちにわかりやすいと言うとどう思われるでしょうか。

枠を設け、一定の基準に自分の行いが達しているかどうか、で測ることは、とてもわかりやすく、普通に受け入れやすいものです。

何なら数字でも表し、また評価しやすいかもしれません。

一方で、イエスさまの言葉も態度もわたしたちの馴染んでいる枠を大きく超えます。

先日から見ている、あの姦淫の現場でとらえられて引きずり出されてきた女性を前に、パリサイ人と律法学者たちは、わたしたちのモーセの律法によれば、この人は石打にされるべきだと、自分たちの枠を主張しました。

でもイエスさまは、「この中で罪のない者が最初にこの女性に石を投げつけなさい」と言い、結果彼女を罰する者がひとりもいなくなると、御自分も可の時に向かい、「わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないよう

に」と伝えています。

今日のところでイエスさまはこう言われました。

8:15 あなたがたは肉によって(人の基準で)人をさばくが、わたしはだれもさばかない。

8:16 しかし、もしわたしがさばくとすれば、わたしのさばきは正しい。

そして続けて、イエスさまは「なぜなら…」と語られます。

なぜなら、わたしはひとりではなく、わたしをつかわされたかた(父なる神)が、わたしと一緒にだからである。

「さばくの？ さばかないの？」…多くの方は、イエスさまのそこに注目します。

しかし、イエスさまはそこで、いつでも神さまが共にいてくださることに、自分の言葉と行動を証ししています。

それは、イエスさまにとって、神さまがいつも一緒にいることが当たり前でありさまであることを示しているのです。

そう受けとめると、少しわかってくることがあります。

あのイエス・キリストの十字架です。

罪のない神のひとり子が、この地上の”人”としての最期を、すべての人の罪を背負うまったく罪人として十字架で苦しみ死なれたことです。

ここにも響く言葉があるのではないのでしょうか。

:16 …なぜなら、わたしはひとりではなく、わたしをつかわされたかた(父なる神)が、わたしと一緒にだからである。

裁かれるはずのない方が、裁かれるという非常識。そのすべての苦しみを受け入れて死なれたあの十字架の犠牲。そのすべてのイエスさまの言葉とありさまに、父なる神さまが共にいてくださったことがわかるのです。

ですからイエスさまは言われます。

8:18 わたし自身のことをあかしするのは、わたしであるし、わたしをつかわされた父も、わたしのことをあかしして下さるのである」。

数字の評価や枠で収まる歩みではない。愛がすべてを覆い、すべてを突き抜ける歩みとなっている。それが父なる神が共におられるイエスさまの歩みであったのです。

わたしたちの目指すところの、霊的成長はここにあります。

Ⅲ. そうして改めて大事なことに目を向けたい

8:12 イエスは、また人々に語ってこう言われた、「わたしは世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう」。

わたしは何度もこのところを読んでいて、イエスさまはパリサイ人たちが聞いている中で、なぜこんな大胆なことを言ったのかと思うことがありました。

わたしの結論はこうです。この言葉は今を生きるわたしたちに対してかけがえのないもっとも大事な言葉だからです。

わたしたちにとって悩みは現実です。悲しみも現実です。争いも、貧しさも、痛みも、病も、そして憎しみも敵意も身近にある深刻な苦しみであり、闇をあらわすでしょう。

でも、信じるわたしたちには信仰の言葉がゆだねられているのです。

イエスさまこそ「世の光である」ということです。

この方に頼り、この方に従って来るものは、イエス様ははっきり言われました。「やみのうちを歩くことがなく、命の光を持つであろう」と。

信じる者の違いは、どっか別の世界で経験するものではありません。この暗闇に見える世にあって、このイエスさまに従うことで経験するものです。その中で命の光を持つゆえです。

さいごに)

塩狩峠のモデルとなった長野という人は、実在のクリスチャンでした。

あの塩狩峠では、その人々を乗せた汽車が暴走する中、彼が大切な人たちのことをもい起こし、でも信仰の決断をもって実を列車の車輪の下敷きに投じたという心が描かれています。

モデルの長野さんについては、小説のように、その一瞬の彼の中で起こった思いと出来事を推しはかることは普通は困難なことです。

結論、普通なら不幸な列車事故の犠牲者としてしか受け止められなかったかもしれません。

しかし、そうでない長野さんご自身の生前の言葉と証し、またいつ天に召されてもよいようにと普段から肌身離さず持っていた遺書からそのことがわかります。

「余（わたし）は諸兄弟が、余の永眠によりて、天父に近づき、感謝の真義を味わわれんことを祈る」と。

この長野さんのようになれということではありません。わたしたちはわたしたちにゆだねられたそれぞれの人生を、キリストとその言葉という命の光をもって照らしながら歩んでいます。キリストに従うことなかで、わたしたちはわたしたちの道を照らす光をしっかりと握って歩むことができれば感謝です。